

芸能としての読経

——『紫式部日記』『栄花物語』にみえる「読経争ひ」を発端として——

田 中 徳 定

はじめに

寛弘五年八月、出産のため土御門邸に遷御していた彰子は臨月を迎えていた。いよいよ出産が間近になると、しかるべき上達部・殿上人達も土御門邸に詰めかけ伺候するようになる。伺候してはいても、特にやることとてない上達部・殿上人達が、つれづれを慰めながら出産までの日々を過ごしている様子を、『紫式部日記』は次のように描写している。

八月二十余日のほどよりは、上達部・殿上人ども、さるべきは、みな宿直がちにて、橋の上、対の簀子などに、みなうたたねをしつつ、はかなうあそび明かす。琴・笛の音などには、たどたどしき若人たちの、読経あらそひ、今様うたどもも、ところにつけては、をかしかりけり。宮の大夫、左の宰相の中将、兵衛の督、美濃の少将などして、あそびたまふ夜もあり。わざとの御あそびは、殿おぼすやうやあらむ、せさせたまはず。

(小学館・日本古典文学全集、一六五頁)

とりとめもなく楽器を演奏して夜を明かす貴族達の中で、琴・笛にまだ堪能でない若人は、読経争いをし今様歌を歌っていた。このような「あそび」も、所柄なかなか興趣のあるものであったというのである。

なお、「読経あらそひ」は、底本・黒川本では「う経あらそひ」とあるものであるが、「う」は「と」の誤写であると考えられており、同様の記事を載せる『栄花物語』巻八「はつはな」では、「そこはかとなき若君達などは、読経争ひ、今様歌ども声を合せなどしつゝ、論じあはて給もおかしう聞こゆ」(岩波書店・日本古典文学大系)とあって、やはり「読経争ひ」であったことが確認できるのである。

さて、このように、『紫式部日記』『栄花物語』の記述からは、本来仏教儀礼の一つであったはずの読経が、貴族社会の中においては、一種の風雅な遊びとしても行われていた様子を窺うことができるのである。そこで、貴族社会における風流としての読経のありようとはどのようなものであったのか、具体的様相を探り、その流れを追ってみようと思う。

一、読経の音楽性

現代にあっても、美しい声で読まれる読経は、聴く者の心にしみ入り、聴聞する者にありがたさや尊さを感じさせるものである。平安時代においても、特に読経の声の美しさが聴聞者に感動を与えたことは想像に難くない。例えば、『法華験記』を見ると、法華経持経者の中でも、読経において聴く者を感動させた僧達については、その声の美しさが特記されていること次の如くである。(引用は岩波書店・日本思想大系『往生伝法華験記』による)

○上・第十一「吉野奥山の持経者某」

威儀具足して、法花経を読みたり。その声深遠にして、琴瑟を調ぶるがごとし。

○上・第十八「比良山の持経者蓮寂仙人」

…遙かに大乘を誦する音声を聞く。その声微妙にして比たとふべきものなし。高からず下みじかからず、深く心府しるに銘せり。

○上・第二十二「春朝法師」

聖人獄に入りて、即ち法華経を誦せり。その声高遠にして、鈴鐸を振ふがごとし。囹圄ひとやの内の人、合掌随喜して、涙を下して悲泣す。

○上・第三十九「叡山の円久法師」

楞嚴院に移り住みて、法華経を誦し、始終に通達して、諷誦無礙なり。音声和雅にして、聞く者胸を叩き、歓喜讚歎せり。

○中・第四十三「叡山西塔具足坊の実因大僧都」

日毎に堂に入りて、法華経を誦せり。その音清こゑく美しくして、聞く人感歎す。

○中・第七十二「光空法師」

その音美こゑしく清くして、振鈴の声のごとし。法華経を誦して、練行年尚し。

○下・第八十六「天王寺の别当道命阿闍梨」

就中に、その音微妙幽美にして、曲を加へず音韻を致さずといへども、任運に声を出すに、聞く人耳を傾けて、

随喜讚嘆せり。

この中でも、春朝法師の読経には、普賢菩薩を始め諸天護法が聴聞に詰めかけ、また、道命阿闍梨の読経は、金峯山の蔵王菩薩・熊野権現・住吉明神・松尾明神が聴聞していたと伝えられている。

これら、読経の美声をいう時に、「その声深遠にして、琴瑟を調ぶるがごとし」「その声高遠にして、鈴鐸を振ふがごとし」「その音美しく清くして、振鈴の声のごとし」と表現されることは注目される。鈴のような美しく澄んだ響きに喩えられるだけでなく、「琴瑟を調ぶるがごとし」ともいわれるように、読経の美声というものは極めて音楽的な捉え方がなされているのである。

このように、聴く者をして、「鈴」や「琴瑟」を連想させた読経は、管弦の遊びの世界とも重なりうるものであったと思われる。例えば、『枕草子』『寺は』から「笛は」にかけての章段構成を見ていくと、清少納言が、読経を聴くことから、管弦の世界へと連想を働かせたらしいことを窺うことができるように思われる。今、岩波書店・日本古典文学大系本によってこのことが窺われる章段を示すと次のようになる（なお、二二三～二二五段は章段の全文）。

二〇八段「寺は」

二〇九段「経は」

二一〇段「仏は」

二一一段「書は」

二一二段「物語は」

二二三段「陀羅尼はあかつき。経はゆふぐれ」

二一四段「あそびは夜。人の顔見えぬほど」

二一五段「あそびわざは、小弓。碁。さまあしけれど、鞠もをかし」

二一六段「舞は」

二一七段「弾くものは」

二一八段「笛は」

萩谷朴氏によれば、「陀羅尼はあかつき。経はゆふぐれ」章段は、梵音で読む陀羅尼は、暁方に聞くのがよく、経は夕暮れに聞くのがよいとして、聴聞する側の音楽的趣味を述べたものであるということである。また、氏は、この章段の前後章段の連想の軌跡について、「書は」→「物語は」章段については、「仏典から漢籍に移ったが、漢籍と日本漢文と、更に純日本の作り物語と、文献三幅対が漢和に二分割された形を執っている」として、「陀羅尼は」→「あそびは」章段については、「文献としての仏典から声楽としての聴覚的效果を持つ諷誦読誦と、視覚的な観点からする器楽の演奏とを、暁（後夜）・夕暮（初夜）・夜（中夜）の夜三時に配分した聴覚三幅対を、宗教・非宗教で二分割する」とされ、「地名・仏教・文献と静止固定したものから、演奏・遊技・舞楽・弦楽・管楽と動的で遊技性に富んだものに移ってゆく接点を、本段の、陀羅尼諷誦・经文読誦を聴く情趣本意の類想が受け持っている」とされている（『枕草子解環』四八同朋舎出版、一九八三年、二六三～二六五頁）。

このように、「陀羅尼は」章段は、陀羅尼・経を聴聞することから、管弦の遊びの世界が連想されたことを窺わせるのである。これは、美しい声による読経は、音楽的興趣を催させるものとして受け取られていたことを示すものである⁽²⁾。そして、このような音楽的興趣との関わりからであろうか、美しい声で読誦される経が、管弦の伴奏を伴っ

て読誦された場合、より美的な音響世界を醸し出すこともあったのである。

例えば、『宇津保物語』「吹上 下」に見える次のような場面。紀伊国吹上の宮に御幸した嵯峨院は、九月十日の明け方読経の声を聞く。院はその尊さに感じて、蔵人に命じてその声の主を訪ねさせて召し出すと、その人物こそ、出家をし、諸国を修行して歩いている忠こそであったことを知る。その時、帝は忠こそその読経に琴の調べを合わさせるのである。

帝、仲頼、行正に琴をその声に調べさせ給ひて、行^{おこなひ}人に孔雀経、理趣経よませ給ひて、合せて聞召すに、哀に悲しく涙落さぬ人なし。

(岩波書店・日本古典文学大系『宇津保物語』一、三七一頁)

これは、どうみても仏教儀礼としての読経ではなからう。忠こそその読経の声は、琴に調べに乗ってさらに尊さを増したことであろうが、聴聞者の涙は、経の尊さよりもむしろ音楽的感興による感動の涙ではなかったか。

このようにみえてくると、平安時代の貴族社会においては、仏教儀礼の場において、経典に説かれる教理、教義を中心として享受する宗教的意味合いの強い読経のありようと、また、それとともに、美しい声による読誦を音楽的興趣として享受するという読経のありようというものがあつたことが見えてこよう。

なお、経の読誦に琴の調べを合わせたということの背景には、忠こそその声が美しかったということとともに、漢詩文の朗詠を聴くということに近い感覚が働いていたように思われる。漢詩文が琴の伴奏を伴って朗詠されたことは、同じく『宇津保物語』「吹上 上」に、

かくて、物の音などかきたて、例の遊など振舞ひて、カラ歌作りなどしつゝ、詠み上げて、君達琴に合せて、諸声に誦んじ給フ。

(岩波書店・日本古典文学大系『宇津保物語』一、三二六頁)

とみえており、その〔絵解〕には、

君だち御文作り給へり。あるじの君、御博士の大学助講師して詠み上ぐ。君だち琴きんに合せて誦むじ給へり。

(同、三二九頁)

と記されているのである。このように、読経はその音響から、音楽世界と重なる部分があったばかりでなく、漢詩文の朗詠と相通じるものでもあったと思われるのである。

二、風流としての読経

読経における、このような漢詩文の朗詠と通じる捉えられ方は、読経が貴族達にとって「あそび」的性格を有する行為ともなり得ていたことを想像させるものである。そして、このことを確認させるのが、『紫式部日記』や『栄花物語』に書き留められた、今様とともに行われていたという「読経争ひ」の記事であった。当時、読経が貴族達のすさび的「あそび」であったことは、『枕草子』によっても窺い知ることができる。

○岩波書店・日本古典大系本一六一段「故殿の御服のころ」

この四月のついたちごろ、細殿の四の口に殿上人あまた立てり。やうやうすべり失せなどして、ただ頭の中將(藤原齊信)・源中將(源宣方)・六位一人のこりて、よろづのこといひ、経読み、歌うたひなどするに、「明けはてぬなり。帰りなむ」とて、「露は別れの涙なるべし」といふことを頭の中將のうちいだし給へれば、源中將ももろともいにをかしく誦じたるに、

(二二六頁。なお、()は稿者注。以下同じ)

ここには、『紫式部日記』にいわれるような若君達だけでなく、藤原斉信・源宣方という貴族達も、夜のつれづれに経を読み、歌をうたっていたことが記されている。また、藤原斉信が帰ろうとして詠じた「露は別れの」は、『和漢朗詠集』巻上「七夕」にも収められる、『菅家文章』巻五「七月七日代牛女惜暁更」の第三句であり、読経が漢詩文の朗詠と相通じる雰囲気の中で行われていたことを窺わせている。

○小学館・日本古典文学全集本（底本・能因本）五七段「職の御御曹子の立部のもとにて」

「とほたあふみの浜柳」など言ひかはしてあるに、若き人々は、ただ言ひにくみ、見苦しきになむ、つくるはず言ふ、「この君こそうたて見えにくけれ。こと人のやうに読経し、歌うたひなどもせず、世間さまざまく、なにしにさらにこれかれに物言ひなどもせず」。

（一四三頁）

（傍線部、三巻本「こと人のやうに、歌うたひ興じなどもせず、けすさまじ」）

これは、藤原行成の取っつきにくさを評する若い女房達の言葉である。三巻本では読経のことがみえないので、後に付け加えられたものと考えられるのであるが、他の貴族達のように読経したり歌をうたって興ずることのないことが、堅物で面白くない人という評価につながっているのである。

このように、一条天皇の御代の頃には、ある種風雅な遊びとして読経が行われていたことから、後世次のように言われることにもなる。

（寛元五年）九月十四日、殿岡屋殿（近衛兼経）の上表なり。事ども果てて、夜更くる程に参らせ給ひて、「あまりに月の面白きに、女房たち誘ひて月見侍らん」とて、南殿・釣殿などの月御覧す。「かやうの月の夜は、村上・一条院の御時は、若き上達部・殿上人など、今様うたひ、読経争ひなど侍りけるに、参りて遊ぶ人のなき、いと

こそ口惜しけれ。今宵の番の人は誰か候ひつる」と問はせ給へば、万里小路大納言（藤原公基）、只今まで候ひつるものを、「今しばし」など申しいでで口惜し。すけよしといふ六位召し出でて、月見るべきやうなど教えさせ給ふもいとをかし。

〔『弁内侍日記』、小学館・新編日本古典文学全集『中世日記紀行集』、一八二―一八三頁〕

ここでは、古き良き御世には、月を愛でながらの風雅な遊びとして、「今様うたひ」や「読経争ひ」が行われていたことが懐古されているのである。村上天皇・一条天皇の時代に、月のおもしろい夜に風雅な遊びとして読経が行われたことは確かめ得なかったが、後冷泉院の時代に、月の美しい夜、漢詩の朗詠とともに経が読まれ、そのことが風流として称賛されたことが、『今鏡』「むかしがたり第九・賢き道々」の中にみえている。

いとやさしくきこえ侍りし事は、いづれの御時にか侍りけむ、中頃の後、上東門院、陽明門などにやおはしましけむ、近き世の帝の御時、めづらしく内に入らせ給へりける時、月のあかく侍りける夜、「昔はかやうに侍る夜は、殿上人、遊びなどこそ、内わたりはし侍りしか。さやうなる事も侍らぬこそ口惜しく」など申させ給ひければ、いとほづかしく思ほしめしけるほどに、月夜のめでたきに、「凜々として氷鋪き」といふ歌を、いとほなやかなる声してうたひけるが、なべてならずきこえけるに、又いといたくしみたる声の尊きにて、無量義経の「微滞先づ墮ちて」などいふ所を、うち出でて読まれ侍りけるが、いづれもいづれも、とりどりにめでたくきこえければ、「昔もかばかりの事こそえ聞き侍らざりしか。いと優なるものどもこそ侍りけれ」と申させ給ひけるこそ、御汗もかわかせ給ひて、御心も広ごらせ給ひにけれときこえし。後冷泉院の御時、上東門院などの入らせ給へりけるにや。又その人々は、伊家の弁、敦家の中将などにやおはしけむとぞ、人は申し侍りし。僻事にや。

（海野泰男氏著『今鏡全釈』下八福武書店、昭和五八年、四四八頁）

月の光が美しい夜、上東門院が内裏にいらした時、風雅の遊びもなかったため、後冷泉院は面目を失うところであったが、伊家の弁（藤原伊家。一〇四六―一〇七七）の朗詠、敦家の中将（藤原敦家。一〇三一―一〇九〇）の読経によってかえって上東門院の称賛を得、後冷泉院は面目をほどこしたというのである。

伊家が朗詠した詩句は、公乗億の「長安八月十五夜賦」と題する漢詩の詩句、「秦甸てんの一千余里、凜々として氷鋪き、漢家の三十六宮、澄々として粉飾れり」で、『和漢朗詠集』巻上「十五夜」に収められており、いかにもこの場の時宜に適ったものであった。

また、敦家が読んだ『無量義経』の一節は、『無量義経』巻頭の徳行品第一の冒頭部分にみえる、「微滯先づ墮ちて以て欲塵を淹し、涅槃の門を開き解脱の風を扇いで、世の悩熱を除き法の清涼を致す」であった。⁽³⁾これは、おそらく清らかな月の光を法の光になぞらえてのことであろうが、それにしても、やはり、美声で朗々と読まれたことが、上東門院の心に感興を催させることになったのであろうと思われる。

なお、『今鏡』の記述の仕方をみると、『無量義経』は訓で読まれていたことが窺われる。経は音・訓両様の読み方がなされていたことは、例えば、『今昔物語集』巻十二「書写山性空聖人語第三十四」に、性空聖人の読経の練達ぶりを、日夜ニ法花経ヲ読誦スルニ、初メハ音ニ読ム、後ニハ訓ニ誦ス。舌ニ付テ早キニ依テ也。然カ訓ニ誦スト云ヘドモ、其レモ吉ク功入テ、人ノ四五枚読ム程ニ、一部ハ誦シ畢ヌ。

（小学館・日本古典文学全集『今昔物語集』(1)、三一七―三一八頁）

と記すことから窺われよう。また、『拾遺往生伝』巻中・一〇「沙門寂入」にも法花経を音・訓で読んでいたことが

みえ、俗人も音・訓両様の読み方をしたことは、やや時代が降るが、『台記』康治元年(一一四二)五月二十九日条に、藤原頼長が生母の忌日に読経供養する際に、「読_ニ寿量品、〔音一反、訓一反〕、阿弥陀仏一万遍」〔_ハ〕は割注。以下同じ〕とみえている。

おそらく、読経が「あそび」として行われる場合には、漢詩文の朗詠と同じように訓で読まれていたのではなかつたかと想像される。

三、相承される読経

さて、『今鏡』にみえる話は、後冷泉院の御代(後冷泉院崩御は治暦四年(一一〇六)八月十九日)のことであったが、この時『無量義経』を読んで称賛された藤原敦家は、『尊卑分脈』によれば、藤原道綱孫兼経男であり、「本朝筆策一芸相伝棟梁也」「管弦得名楽道之名匠」と記される、音楽の道において名を得ている人物であった(なお、美声の読経で知られる道命は叔父にあたる)。

ところで、興味深いことに、敦家の子敦兼も読経の名人であつたらしいことが、『台記』から窺われるのである。『台記』保延二年(一一三六)十月九日条に、

癸卯、雨下、仁和寺女院(待賢門院)、新御堂供養習礼也、予不参、只参_ニ近衛殿、入_レ夜敦兼朝臣参入、暫御对面、大殿(藤原忠実)被_レ仰曰、可_レ有_ニ読経、敦兼読経、殿中人、自_ニ殿(藤原忠通)已下、驚_レ耳感、〔耳感一本作感耳〕次予退出、

(引用は増補史料大成による。以下同じ)

とあり、敦兼の読経が忠通以下殿中の人々の耳を驚かすものであったことを記しているのである。おそらく、敦兼は、父敦家の読経の風を継いでいたものと思われる。そしてさらに、この敦兼の読経の風は、外孫藤原俊盛へと受け継がれていったのである。

『古今著門集』巻第六「管弦歌舞第七」、二八二話「鳥羽法皇天王寺へ御幸あり念仏堂にして管弦の事」に次のような話がある。

久安三年九月十二日、法皇天王寺へ御幸ありけり。内大臣御共に候はせ給けり。十三日念仏堂にて管弦ありけり。歌併笛資賢、笙内大臣、篳篥俊盛朝臣、但不堪のよしを申て吹かざりけり。琵琶信西、箏六波羅別当覚暹、法皇笛をふかせおはしますとて、「沙門の身にて、此事あざけりあるべし」とて、障子に居かくれさせおはしましたけり。御出家の後、このたびはじめてふかせおはしましたけり。先雙調、…(略)…青海波、竹林楽二三帖、拍柱、千秋楽この外猶催馬楽ありけるとかや。朗詠・今様・風俗など数反ありけり。資賢朝臣ぞつかうまつりける。朗詠は法皇御発言ありけるとぞ。其後、俊盛朝臣読経つかうまつりけり。人々興に乗て、覚暹・信西、揚真操弾けり。法皇の仰に、「資賢は催馬楽の道長者なり」と叡感ありけるは、このたびの事也。いかに面目に思ひけむ。

(岩波書店・日本古典文学大系、二二八～二二九頁)

久安三年(一一四七)九月十三日、天王寺に御幸した鳥羽法皇は、念仏堂で管弦の遊びを催し、数々の雅楽が演奏され、催馬楽があり、朗詠・今様・風俗が謡われ、読経が行われた。そして、さらに興が乗り、琵琶の秘曲「揚真操」まで弾ぜられたというのである。

この話とほぼ同じ内容が、『台記』同年九月十四日条に記されており、この話が実際の管弦の催しを踏まえている

ことが確認できるのである。

十四日乙亥、晴、巳時参上、依_レ召候_ニ御前_一、召_ニ法師於御前庭_一、賜_ニ小袖_一、未刻下_ニ宿所_一、先_レ之法皇使_ニ右衛門尉公俊賜_ニ松茸_一、予_ニ帰参_一、「今度、依_レ仰着_ニ無欄之直衣、蒲色裏濃_一」、幸_ニ聖靈院_一、令_レ説_レ絵、奉_レ見_ニ太子影_一、及_レ暗幸_ニ念仏所_一、行法了、勅_ニ群臣_一泰_ニ管弦_一、勅曰、笛〔笛小本一本作歌〕、資賢朝臣、笙内大臣、篳篥俊盛朝臣歟、但称_レ不堪不_レ吹_レ之、琵琶信西、〔通憲法名〕、箏覚暹、〔六波羅別当、依_ニ爪折_一改弾_ニ琵琶_一、候_ニ寶子_一〕、笛資賢朝臣、〔其実、法皇親吹、但資賢時々吹〕、法皇曰、為_ニ沙門_一吹_レ笛、可_レ招_レ嘲、即居_ニ隱障子_一吹_レ之、予_ニ猶近候_一、聞_ニ御笛音_一者、上下莫_レ不_ニ歎美_一、御出家後、今夜初吹云々、先雙調、…〔略〕…青海波、竹林楽、伯柱、千秋楽、朗詠、今様、風俗、各数反〔資賢〕、読経一度、〔俊盛、人々□□□□□□□□□□歎美、伝_ニ外祖敦兼朝臣之風_一〕、興酣、覚暹、信西、弾_ニ揚仁操_一…〔略〕…今夜朗詠之間、法皇、及予、信西、助音、此内、一度法皇発音、〔自余、皆資賢発首〕、法皇謂、資賢朝臣催馬楽之長者也、…〔後略〕

とあって、この管弦の遊びが、念仏の行法が終わった後の遊宴であったことが知られるのである。その遊びの中で行われた読経もまた、朗詠・今様・風俗とともに行われた、芸能としての読経であった。この記事で注目されるのは、俊盛の読経についての注記である。聴いた人々が嘆美したその見事な読経は、外祖父敦兼の風を伝えていたというのである。今までみてきたように、敦兼の読経は敦家から受け継いだものであったらしいことから考えると、読経の風というものも、一つの芸能として、“家”において代々受け継がれていたものらしいことが窺われてくるのである。

ま
と
め

いままでみてきたように、読経は、基本的には仏教儀礼の一つであったのであるが、美声による読誦は、音楽的感興を催させるものとして享受されていたのである。また、それとともに、貴族達にあっては、風流の一つとして、漢詩文の朗詠や今様とともに読経が行われてもいた。このような風流としての読経は、一条朝の頃には、つれづれを慰めるてすさびとしての「あそび」であったものが、院政期になると、管弦の場における芸能としての位置を獲得していったようである。前にあげた『古今著聞集』・『台記』久安三年九月十四日条にみえる記事は、天王寺における念仏の行法後に行われた管弦の催しであるので、寺院という場所柄、宴楽の一つとして特に読経が行われたということも考えられるのであるが、寺院における法要後の管弦の場以外においても、芸能の一つとして読経が行われていたようなのである。それは、例えば、『台記』康治二年（一一四三）十月二十四日条によって窺うことができるように思われる。

十月二十二日に藤原忠実の天王寺参詣に随行した頼長は、二十三日舟にて都に帰る途中鳥飼に一泊する。その翌日の記事に次のようなことがみえている。

二十四日丁未、晴、未明出_レ舟、比_レ至于宇治川、余参_ニ御舟、戌刻、還_ニ御宇治小松殿、其後降雨、余立_レ舟之間、季通朝臣、成隆、公重、伊俊等、有_ニ朗詠、今様、読経等之興、有_ニ酒程、〔程小本作膳可従〕、深更欲_レ向_ニ網代、依_レ雨停了、夜半雨晴云々、

ここからは、普段の遊芸の場においても、朗詠・今様とともに、芸能の一つとして読経が行われていたこと、そしてそれは酒宴の場であったことを窺うことができよう。

芸能としての読経については、夙に新聞進一氏が、後白河法皇の芸能への耽溺を論じられる中で次のように指摘されている。

法皇は又説経・読経をも鑑賞し給うた。「源平盛衰記」に伝へるところの法皇御出家の後、法住寺殿にて、徒然の余り、飛驒守有安を召して「読経仕れ」と仰せられ、有安懐より笛を取出し、ちと吹き鳴し、「王出家已後、常勤精進、於八万四千歳、修行妙法華」と後の字を附け加へて、即妙の詠に一座の感を得た話（巻三、有王嚴王品を讀む事）の如き、音芸としての読経の愛好者としての法皇の様子が拝される。読経が芸能化したことは、早く「紫式部日記」に見える「読経争」の語や、その他の王朝物語の記事に頻出する読経耽溺の記事から容易に知り得るのである。…（中略）…法皇のこの種の仏教音芸への傾注もまた、当時の芸能界へ多大の影響を及ぼしたであらうことを思はざるを得ない。「読経口伝明鏡集」に

此御時一天下皆以_レ法花経_レ為_レ旨、不_レ翫_レ之輩更人而_レ非人。法皇常此事御口スサミセサセ給ケリ。
とあるのは、端的にその間の消息を物語つてゐる詞に外ならない。

（『歌謡史の研究 その一 今様考』△至文堂、一九四七年、四九〇五〇頁）

氏が指摘しておられるように、読経が芸能化したことは、『紫式部日記』をはじめとする王朝の文学作品にあらわれていたことであった。本稿においては、特に風流としての読経のありようについて、その具体的様相を探ってみたのである。そして、このことから、後白河法皇の音芸としての読経愛好ぶりを考えてみると、後白河法皇の少年時代

に、すでに管弦の催しの場において、今様とともに芸能としての地位を獲得していた読経のありよう、また、音楽の道において名を得ていた貴族の家において相承されていた読経のありようというものが、後白河法皇の音芸としての読経愛好を導き出すことになったのであろうことが窺われてくるのである。

また、『梁塵秘抄』所収の法文歌をみると、仏教色が濃く、経典の内容を歌った歌が多いのであるが、このことについて、今様とともに風流の場において読まれていた読経のありようが大きく関わっていたものと思われる。榎克朗氏は、『平家物語』「祇王」にみえる今様（仏御前のために清盛邸を追われた祇王が、後に仏を慰めるために西八条邸に呼び出された折に歌った今様）と、『古今著聞集』巻第八「好色第十一」、三二三話「仁和寺の童千手参川が事」にみえる今様（覚性法親王の寵愛が参川に移り、そのことを嘆いて歌った千手の今様）に触れられ、建前としての法文歌に本音としての煩悶が込められて歌われたことを指摘された後、

それにしても、娯楽や酒宴の席での余興として、このような抹香くさい文句の歌が、別に何の不都合もなく歌われ享受されたということは、現代人にとって真に驚きである。が、法文歌はもともと声明（仏教の典礼歌謡）ではなく、今様の一種目だったのであり、そして今様とは当時の流行歌の総称であった、ということ忘れてはならない。

（『今様歌』『仏教文学講座第七巻、歌謡・芸能・劇文学』、勉誠社、一九九五年）

と述べられた。

院政期の娯楽や酒宴の席においては、現代から見ると抹香くさい流行歌が歌われていたであろう。しかし、そのことには、読経そのものが娯楽や酒宴の席において行われていたという、この時代までのそしてこの時代の、芸能としての読経のありようというものを抜きにしては考えられないように思うのである。

〔注〕

(1) 「読経争ひ」は、松村博司氏『栄花物語全注釈』二(角川書店、一九七一年)の語釈によれば、「読経の競争。経文中の主要な文句を諷誦して、その声や節回しのよさを競うこと」ということである。なお、氏は、同語釈の中で、能因本『枕草子』「職の御曹司の立部のもとにて」・「宰相中将齊信・宣方の中将」、『弁内侍日記』の用例を紹介されており、本稿を成すにあたってお教えを蒙った。

(2) 梵音で読まれる場合においても、美声による読誦は聴聞者を感動させたことは、例えば、『三代実録』元慶三年(八七九)正月三日条にみえる真雅卒伝の次の記事によって窺うことができる。

僧正法印大和尚位真雅卒。…(略)…十九歳受具足戒。微侍内裏。於帝御前。誦真言卅七尊梵号。音響清徹。宛如貫珠。聴者莫不絶倒。帝大悦之。

(3) 『無量義経』德行品第一に「微滯先墮以淹欲塵。開涅槃門扇解脫風。除世熱惱(熱とす本もあり)致法清涼」(大正新脩大藏経、第九卷三八四b)と見え、その訓みは、『国訳一切経』に従うと、「微滯先づ墮ちて以て欲塵を淹し、涅槃の門を開き解脫の風を扇いで、世の熱を除去法の清涼を致す」である。

〔付記〕 『紫式部日記』『栄花物語』にみえる「読経争ひ」という言葉に、仏教儀礼ではない読経のありようということが気に掛かっていた。近時、柴佳世乃氏の御発表「道命阿闍梨考―「能読」の観点から―」(伝承文学研究会第二六五回東京例会、一九九六年一〇月一九日)に接し、氏が道命の「能読」について述べられる中で紹介された『読経口伝明鏡集』に、「能読」の相承というべき系譜が、僧俗を含めて記されていることをお教えいただいた。そこで、俗の世界における読経のありようを、「能読」の相承ということを視野に入れながら考えてみたのが本稿である。本稿をまとめる契機をいただいた柴氏に、記して感謝申し上げる次第である。